

ることを期待したい。(東京大学出版会、一九八二年二月刊、A5判、五七三頁、索引一七頁)

イブン・アブド・アッザーヒル著

『バイバルス伝』の新刊行史料

佐藤 次高

(一)

マムルーク朝の第五代スルタン・バイバルス Baybars (在位一二六〇～七七一年)の治世は、モンゴル軍と十字軍とに對する輝かしい聖戦の成果ばかりでなく、アッバース家カリフの擁立や四正統法学派の公認、あるいはイクター授与によるシリア占領地の秩序維持などマムルーク体制樹立のための努力の故にも注目し値する。しかしこのような重要性にもかかわらず、この時代についての基本史料の研究とその刊行は極めて遅れた状況にあるといわなければならぬ。Bar Hebraeus (d. 1286) のシリア語年代記を除けば、バイバルスの治世に係る同時代史料として現在知られているのは以下の四点である。

批評と紹介 佐藤

- (1) Abū Shāma (d. 1267), *al-Rawdatayn fi Akhbar al-Dawlatayn*, 2 vols., Būlāq, 1871-75.
 - (2) Ibn Wasīl (d. 1298), *Mufarrrij al-Kurab fi Akhbar Banī Ayyub*, 5 vols., al-Qahira, 1953-77.
 - (3) Ibn Shaddād (d. 1285), *al-Rawda al-Zahira fi Sirat al-Malik al-Zahir*.
 - (4) Ibn 'Abd al-Zahir (d. 1292), *al-Rawq al-Zahir fi Sirat al-Malik al-Zahir*.
- これらの史料のうち、完全な刊本となっていないのは(1)の Abu Shama の年代記だけであって、(2) Ibn Wasīl の年代記は、バイバルスの時代を含む最後の巻(六六六～六六一一年)が未刊である。また(3)はバイバルスの宰相 Bahār al-Dīn b. Hanna の秘書であった Ibn Shaddād の筆になる『バイバルス伝』であるが、この書は写本の発見者である S. Yalrkaya が持ってトルコ語の抄訳 *Baybars Tarihi* (Istanbul, 1941) が公刊されているにすぎない。写本は Edirne の Selmīye kütüphanesi に納められており、トルコの現状を考えるとこのマイクロフィルムを入手するのは容易なことではないといわれる。(4)は同じくバイバルスの公文書係を務めた Ibn 'Abd al-Zahir の『バイバルス伝』であるが、これまでは六六三年までの記述を含む不完全な British Library (以前は British Museum) 写本が、S.F.

Sadeque によつて英訳を付して公刊されていた。⁽⁴⁾ さらに、ハイバルスからナースィル al-Nasir (在位一二九四〜九五、一二九九〜一三〇九、一三〇九〜一三四一年) に至る時代の基本史料である Baybars al-Manṣūrī (d. 1325) の *Zubda al-Fikra fi Tarīkh al-Hijra* (Ms., British Library, Add. 2325 II) によつても、未だに厳密な校訂本は出版されてゐないのが現状である。

したがつて、ハイバルス時代を含むマムルーク朝初期のヒジプト、シリア、およびヒジャーズ史を本格的に研究するためには、各地に散在するこのような写本史料を利用することが不可欠の条件であつた。近年、この欠を埋めるべくサウデー・アラビア王国の 'Abd al-'Azīz al-Khuwayfir 博士は、Ibn 'Abd al-Zāhir の『ハイバルス伝』を British Library 写本より完全な Istanbul 写本 (Faith Library, no. 4367) に基いて校訂・出版した (al-Riyādī, 1976)。この機会に新刊行本の意義を検討し、合せてこの史料を駆使した博士のハイバルス研究の紹介を試みてみたい。あらかじめ校訂者の経歴を述べておく。'Abd al-'Azīz b. 'Abd Allāh al-Khuwayfir 博士は一九二六年ナジマドのウナイザ町に生まれ、カイロのダール・アルウルームを卒業後、ロンドン大学の School of Oriental and African Studies に学んで一九六〇年ハイバルス研究によつて学位を取得した。帰国後はリヤード大学事務

総長 (amin 'amm) や保健相 (wazīr al-ṣiḥḥa) などの職を歴任した後、一九七五年から教育相 (wazīr al-tarbīya) に就任して現在に至つてゐる。

①

『ハイバルス伝』の著者 Ibn 'Abd al-Zāhir は完全な Muḥī al-Dīn Abū al-Faḍl 'Abd Allāh b. Rashīd al-Dīn b. Na-shwān b. 'Abd al-Zāhir al-Sa'dī al-Misrī とし⁽⁵⁾、六一〇 (一二三三) 年、マイニーフ朝治下のカイロに生まれた。父も学識の高い裁判官 (qāḍī) として知られ、Ibn 'Abd al-Zāhir はこの父から学問の手ほどきを受けた後、多くのシャイフに師事して法学、神学、言語学、歴史学などのイスラム諸学を修めた。とりわけタハリイやイブン・アルアスィールをはじめとする歴史書の研究は、その後の伝記の執筆に大きな影響を及ぼしたと伝えられる。勉学を終えてからは一貫して文書庁 (diwān al-inṣhā') に書記 (kātib) —— 後にその長官 (sāhib) —— として勤務し、常にハイバルスの近くにあつて公文書の作成にたずさわつた。この書はハイバルスの生前に一応完成したが、没後にかんがりの増補・改訂が加えられたらしい。ハイバルス時代以後も、引き続き二人の息子バラカ Baraka (在位一二七〜一八〇) とサラーム Salāmish

(在位二二八〇〜二八〇)に仕え、さらにカラーウーン Qalawūn (在位二二八〇〜二九〇)時代の文書庁に息子の Faḥ al-Dīn と二人して務めた後、六九二(一二九二)年にカイロで没した。

Ibn 'Abd al-Zāhir の著作には、『バイバルス伝』の他に、カラーウーン⁽¹⁾の伝記として史料の価値の高う *Taḥrīf al-Ayyam wal-'Uṣar fi Sira al-Malik al-Mansūr* (M. Kamīl ed., al-Qahira, 1961) とカラーウーン⁽²⁾の息子であるハリール Khālīl (在位二二九〇〜二九四)の時代を扱った *Alaḥ al-Khaḥḥa min al-Sira al-Sharīfa al-Sulṭāniyya al-Asrafīyya* (A. Moberg ed., Lund, 1902) の二書が伝やられている。また Magrīzī (d. 1442) の『地誌』*al-Khiṭaṭ* の主要典拠ともなった *al-Rawda al-Bahya al-Zahira fi Khitāṭ al-Muḥizziyya al-Qahira* ⁽³⁾ と伝書鳩を主題とする *Kitāb Tamā'im al-Hamā'im* ⁽⁴⁾ Ibn 'Abd al-Zāhir の著作として知られているが、これらの写本は現在いずれも散佚して伝わらない。

前述したように Ibn 'Abd al-Zāhir の『バイバルス伝』は、これまで British Library 写本だけがサデク女史によって公刊され、この刊本が一般に広く利用されていた。フワイヤール博士は、この British Library 写本以外に Istanbul 写本を用いて、より完全な『バイバルス伝』を刊行したので

ある。British Library 写本が六六三年の記述の途中で終わっているのに対して、Istanbul 写本は、バイバルス治世末の六七六年までの記述を含んでいる。新刊行本の頁数でいえば、British Library 写本は四五〜二二五頁まで、Istanbul 写本は六四〜四七六頁であるから、二二五頁から四七六頁までが Istanbul 写本によって新たに補充された分に相当する。したがって、キプチャク・ハン国のバルケと同盟関係を結ぶことによつてイル・ハン国包囲の体制を固めたバイバルスが、六六三(一二六五)年以降対十字軍戦争に従事し、さらにヌビアにも侵攻する過程は、この新刊行本によつてさらに詳細に検討することが可能になったといえよう。

校訂は厳密に行われ、British Library 写本との異同以外に、明らかに写本が誤っているとみなした語句は訂正され、その事実はずべて註で指摘されている。また本文中にあらわれる重要な事件や用語、あるいは地名についても適確な註がつけられていて便利である。例えば、バイバルスがアラビア語の翻訳官 (mutarjim) に賜衣を授与した件については、これをもつてバイバルスがアラビア語を解さなかったとすることはできないとして、その理由を詳細に説明している(八五〜八六頁)。旧刊行本との語句の異同は、British Library 写本だけが存在する四五〜六四頁について三ヶ所、両写本が共通して存在する六四〜二二五頁については実に二八ヶ所

に達する。なかには *har'* と *ḥ'* *marbuta'* *yash'uru* と *tash'uru* のように意味上に変化のない異同もあるが、二十七日と十七日のように日付に違いがみられる場合もあるし、トルコ人やモンゴル人の名前についてはかなりの異同が認められる。どちらの校訂本がより正しいかにわかには断定できないが、重要部分については、やはり二つの写本を比較検討してみることが必要であろう。

フワイティル博士も指摘するように、⁽⁸⁾ 常にバイバルスの近くにして公文書を自由に利用できる立場にあった Ibn 'Abd al-Zahir の書が、バイバルス研究のための第一級の史料であることは疑いない。しかしその立場上、スルタンに都合の悪い部分は省略し(例えば、奴隸として売られた少年時代の記述が少ないこと)、またクトズ Qutuz (在位一二五九—六〇)の殺害によってバイバルスが権力を握ったことを民衆が喜んだとしてその正当化をはかる(六九—七〇頁)など、幾つかの欠点も存在する。これらの点を補正するのが、同じくフワイティル博士によって校訂・出版された Shafr̄ b. 'Alī (d. 1330) の *Kitāb Husn al-Manāqib al-Sirrīya* (al-Riyād, 1976) である。⁽⁹⁾ Ibn Raḥīf (d.) の Shafr̄ b. Ibn 'Abd al-Zahir の孫としてゐるが、正しくはその甥であるという。これにせよ Shafr̄ b. Ibn 'Abd al-Zahir の息子である Faḥr al-Dīn の助手を経て文書庁に勤務する

ようになり、六八〇(一二八一—二)年直後のヒムスの戦で失明してから Ibn 'Abd al-Zahir の『バイバルス伝』を要約する書を著した。これが *Husn al-Manāqib* である。⁽¹⁰⁾

al-Manāqib 'a min al-Sira al-Zahirīya の副題が示すように、この書は『バイバルス伝』から主要部分を抜粋してその抄本 (*muntaza'a*) を作ることに由来の目的であった。しかし Shafr̄ b. 本書の前書きに当る部分で、「当時の状況は彼 (Ibn 'Abd al-Zahir) に、価値のないことと余計なことを書き記し、スルタンの前で讒辭をくり返し、またスルタンとの契約 (*yamin*) ではなく、彼に対する忠誠心 (*sadiq*) を持つことを余儀なくさせた」(*Husn al-Manāqib*, 26) と述べている。この言葉から判断すれば、明らかに彼はバイバルスの事跡を相対化し、より客観的に記述することの必要性を感じていたように思われる。事実 *Husn al-Manāqib* の本文中には、十四ヶ所にわたって『バイバルス伝』の記述と対比する形で Shafr̄ 独自の見解が明確に記されている。二、三の例をあげてみよう。

(1) 六五九(一二六一)年、アッバース家のカリフ・ムスタンスィールがバグダード奪回軍を起した時、Ibn 'Abd al-Zahir によれば、バイバルスは大軍を編成してこれに援助を与えたという。しかし私 (Shafr̄) に言わせれば、そして成功の見込みのないそのような企てに同意したこと自体

驚くべきことである。カリフは有能な人物であったにもかかわらず、モンゴル軍に比して兵員が少なかったために敗北して殺されたのだが、Ibn 'Abd al-Zahir はこれについて一言も触れるところがない (Husn al-Maqtib, 33, 46)。

(2) 六六一(一二六三)年、ハイバルスがアレキサンドリアのモ斯塔で礼拝をした時、説教師の Ibn Abi al-Faraj はフトバの中でスルタンの悪政を批判し、不正な君主に対して神が約束されたことを語って警告した。ハイバルスは直ちにこの説教師を罷免したが、Ibn 'Abd al-Zahir はこの話を伝えている (Husn al-Maqtib, 64-65)。

以上の他にも、四正統法学派公認の真の原因は、それまで他の法学派に優越して権力をあつたシャーフイー派の大カトラーイー Taj al-Din がその無能ぶりを露呈したことであること (Husn al-Maqtib, 103) など、興味深い異説^(註)あるいは補正の記事が述べられている。サデク女史が述べるように、ナースィル時代の宮廷史家が一様にハイバルスを暴君とみてその政治を過少評価する傾向にあったことは注意しなければならない。Shah, もそのような歴史家の一人には違いないが、しかし一人称の形で Ibn 'Abd al-Zahir の記述ははっきりと修正してゐる点で、他の歴史家とは異なる Shah の公正さがあらわれているといえよう。

(註)

この点で Ibn 'Abd al-Zahir の『ハイバルス伝』とこれを補正する Shah の抄本とを校訂したフワイヤール博士は、この点の史料を用いて *Barbars The First—His Endeavors and Achievements* (London, 1978) と題してハイバルス研究を公刊した。^(註) ハイバルスについては、これまで M. J. Surtur *al-Zahir Baybars (al-Qahira, 1398)* と *Dawala al-Zahir Baybars fi Misr (al-Qahira, 1960)* の二書^(註)を述べた S. F. Sadegue *Baybars I of Egypt* (Dacca, 1956) が主な研究として知られている。およびこれ以外に H. Rabie *The Financial System of Egypt* (London, 1972) と P. M. Holt *The Position and Power of the Mamluk Sultan* (BSOAS, vol. 38, 1975) の二書など、ハイバルスを含む初期マムルーク朝スルタンの政治・経済政策などを扱ったものも加えれば、ハイバルス関係の研究文献はかなりの数に達するであろう。ここではハイバルスとその時代を扱った研究に限定して、これとフワイヤール博士のハイバルス研究とを比較してみることとした。ただスルールの二書では Maqrizi や Abu al-Fida (d. 1331) などの二次史料だけが用いられ、基本史料である Ibn Shaddad や Ibn 'Abd al-Zahir の『ハイバルス伝』は利用されてい

ないので、結局はサデク女史とフワイティル博士の研究をとりあげれば充分であると思う。

サデク女史の *Babars I* は、Ibn 'Abd al-Zahir のアラビア語テキスト以外に、次の三部から構成されている。第一部「史料」(一〇二八頁)は(一)歴史的資料と(二)現代の歴史家から成り、(三)では(a)同時代の歴史家、(b)ナースィル時代の歴史家、(c)十四世紀後半の歴史家、(d)十五世紀の歴史家に分けてそれぞれの史料的な価値を検討している。第二部(二九〇七三頁)はバイバルスの生涯の略伝で、全体を七期に分けて年代順に経歴をたどり、最後にバイバルスの性格とその政治的成果を総合的に記述する。この部分は、従来バイバルスの生涯にかんするものとも信頼すべき記述であるとされてきたものであるが、Ibn 'Abd al-Zahir の Istanbul 写本を利用することができなかった著者は、六六三(一二六五)年から六七〇(一二七二)年の間については、Ibn 'Abi al-Fadl'i や Magrizi など後代の歴史家の年代記を利用している。最後の第三部(七四〇三三九頁)は British Library 写本の英訳である。

一方、フワイティル博士の *Babars The First* は四部から成り、第一部「バイバルスの人生初期」(三〇八頁)は、バイバルスがモンゴル軍の捕虜となってシリアに売られた後、スルタン・サーリフ Saïh (在位一二四〇～四九)のバ

フリー・マムルーク軍に編入され、一二五〇年にマンスーラの戦いでルイ九世を捕虜とするまでを扱う。第二部「権力闘争」(九〇三三頁)は、トゥーラーンシャー Tūānshāh (在位一二四九～五〇)の殺害後、アイバク Aybak (在位一二五〇～五七)との権力闘争に敗れたバイバルスが、バフリー・マムルーク軍を率いてシリア各地を転々とし、やがてアイン・ジャールートの戦い(一二六〇年)でモンゴル軍を撃破するまでの過程を叙述する。続く第三部「スルタン・バイバルス」(二四〇一四二頁)は本書の中核となる研究で、(一)権力の掌握、(二)内政とその方法、(三)外交政策とその方法の三章に分かれ、特に第三章では、キプチャク・ハン国、イル・ハン国、十字軍(フランク)、イスマール派、ビザンツ帝国、そしてヌビアとの関係が基本史料にもとづいて詳細に描き出されている。また第四部(一四四〇一九〇頁)は、(一)伝記と同時代の年代記、(二)碑文と貨幣、(三)十四・五世紀の年代記から成る史料解説であるが、人名辞典を駆使した本格的な研究で、この部分だけでも従来の研究をはるかに凌駕しているといえるであろう。

以上の簡単な紹介からも明らかのように、フワイティル博士の研究の特徴は、サデク女史に比べて、まず何よりも史料の利用の仕方が一段と充実している点に求められる。サデク女史が Ibn 'Abd al-Zahir の Istanbul 写本を利用できなかった

ったことは前述したが、フワイテール博士は Ibn 'Abd al-Zahir の British Library 写本と Istanbul 写本、それと Ibn Shaddad の Edirne 写本をすべて利用し、ハイムルスの治世を根本史料にもとづいてはじめて全体的に叙述したのである。しかもこれらの史料にはハイムルスに対する評価の甘さがあることを考慮して、『ハイムルス伝』の叙述に批判的な Shaif' の *Hasn al-Manaqib* をつき合わせておこうという方法を採用した。例えばハイムルスの権力掌握の仕方についても「支配者を殺した者がこれに取って代わる」とするトルコ人の慣習を考慮してハイムルスは一人でタトズを殺したとする Ibn 'Abd al-Zahir の記述に対し、これを事実と反すると主張する Shaif' の意見を著者は積極的にとりあげている(二二六～二七頁、一五九頁)。ハイムルスをめぐる歴史的事実は、このように客観的な叙述方法と豊富な史料の利用によって数多く明らかにされたといつてよいであらう。その意味で本書はハイムルス研究の水準を確実に引き上げたのであるが、しかしその叙述の範囲はあくまで政治史の分野に限られている。イクター授与による国内統治のあり方や経済政策の実態など今後の研究に待たなければならぬ問題を決して少なくない。ハイムルスとその治世についての評価は、これらの問題を含めた総合的な研究の後にはじめて下されるべきものと思う。

批評と紹介 佐藤

註

- (1) Bar Hebraeus (Abū al-Faraj), *The Chronography of Gregory Abū'l Faraj*, ed. & tr. by E. A. Wallis Budge, 2 vols., London, 1932.
- (2) ① Ibn Shaddad 氏の著作 'Izz al-Din Abū 'Abd Allah Muhammad b. 'Alī による 聖王 al-'A'laq al-Khaira fi Dhikr Umar' al-Sham, 3 vols., Dimashq, 1953-63 の著作がある。② 氏の著作 al-Nawadir al-Sultaniya, al-Qahira, 1964 の著作 Bahā' al-Din Ibn Shaddad (d. 1239) とは別人である。
- (3) Yalkaya 氏の写本番号が 一五〇七と記してある。ノートナー博士は二三〇六と記してある (*Barbars. The First*, London, 1978, p. 192)。
- (4) *Barbars I of Egypt*, Dacca, 1956.
- (5) Ibn 'Abd al-Zahir の経歴については、その著り次の文辭を参照。Ibn Taghribirdi, *al-Nujūm al-Zahira* (16 vols., al-Qahira, 1963-72), vol. 8, 38-39; S.F. Sadeque, *op. cit.*, pp. 3-5; Ibn 'Abd al-Zahir, *al-Rawā' al-Zahir*, 'Abd al-'Aziz al-Khwayyir ed., "Munaddima", pp. 9-15; *Encyclopaedia of Islam* new ed., s.v. Ibn 'Abd al-Zahir.

- (9) A.R. Guest, A List of Writers, Books, and Other authorities mentioned by El-Magrizi in his *Khiṭāṭ* (JR-AS, 1902), p. 120; M.A. 'Inān, *Miṣr al-Islāmiyya wa-Tārīkh al-Khiṭāṭ al-Miṣriyya* (al-Qāhira, 1969), pp. 46-47.
- (10) Magrizi, *al-Khiṭāṭ* (2 vols., Baḥāq, 1270 H.), II, 231; Qalqashandī, *Ṣubḥ al-Aṣḥā* (14 vols., al-Qāhira, 1963), II, 90; Hāji Khalifa, *Kaṣḥf al-Zunna* (2 vols., Istanbul, 1941), I, 482.
- (11) A. al-Khuwayyir, *al-Rawḍ*, "Muqaddima", pp. 29-35.
- (12) Ibn Hajar al-'Asqalāni, *al-Durr al-Kāminā* (5 vols., al-Qāhira, 1966-67), II, 281-283. 又 Nāṣir al-Dīn Shāfi' b. 'Alī b. 'Abbās al-Kināni al-'Asqalāni al-Miṣri の経典の著述についてその文庫を参照。S.F.

Sadeque, *op. cit.*, p. 6; A. Khawāter, *Baibars The First*, pp. 175-179; Husn al-Manāqib, "Muqaddima", pp. 14-15.

- (13) 著述の成書およびその完成は十一六年シヤレーミー月(一三二六年七月)である(Husn al-Manāqib, 176)。フロートマン博士は本書の完成をコトコ(一三二二)年であると推定するが、後述の語彙の比較から(Husn al-Manāqib, p. 176)。

(14) S.F. Sadeque, *op. cit.*, p. 8.

(15) この点についてはフロートマン博士は *al-Malik al-Zahir Baybars* (al-Riyād, 1976) の題名のギリシア語の「インペリス」を發表してゐるが、構成・内容とも英文の「インペリス」とはほとんど異なる。但しアラビア語本では英語本の第四部にある史料解説は省略されている。